

## 海外社会保障情報100号記念号に寄せて ——創成期の思い出

平 石 長 久

『海外社会保障情報』（以下、『海外情報』と略称）の100号記念号の刊行にあたり、編集担当者から創成期の苦労話を求められた。まず、通算100号の刊行に慶賀を述べさせて頂く。それにしても、『海外情報』は私が編集に参加して創刊されてから、いつの間にか100号になっていたらしい。

ところで、元来、呑気な私は過ぎ去ったことに興味がないし、そのようなものは忘れてしまうので、「創成期の話を」といわれても、書くことはないのである。強いて思い出しても、苦労したことはほとんど覚えていない。大した苦労ではないが、若干の例をあげれば、読み易いように活字を少し大きくしたり、空白の部分を多くしたり、硬い感じを避けるために、漢字を少なくするなどの工夫をした。しかし、これらが成功したとも思われない。また、当初では、厚生省、国会図書館、健保連、全社協などの好意と協力により、それらの各ブロックと社会保障研究所（以下、研究所と略称）が、それぞれ材料を提供する仕組みになっていたので、原稿を集める苦労は余りなかった。しかし、そのうちに原稿が少なくなったときには、あたかも綻びをつくらうように、私がよく穴埋めの原稿を書いていた。

それはともかく、創刊当時に、ISSA（国際社会保障協会、本部はジュネーヴ）は各国から届けられた各種の論文の抄訳を、『要約』（ここでは略称）として各国の加盟団体に配布していた。その『要約』は各給付部門別に色分けされ、1編ずつが1枚の用紙の表と裏（字数をほぼ定めて）に、ISSAの用いる公式用語の英語、フランス語およびスペイン語でそれぞれ印刷され、研究所には英語版が届いていた。他の出版物と同様に、その『要約』はISSAの方針で他の国語に翻訳し、刊行できないことになっていた。『海外情報』を創刊するときに、私達はこの『要約』を拝借しようと考えて、ISSAが調査・研究活動の協力要員（世界中に約60の個人と組織を登録していた）としていた私の立場（現在でも続いている）を利用し、当時の事務総長で、私の知人であったウィルドマン氏（引退後に故人）に、「『要約』をできるだけ多くの人びとに紹介したいので、無料で配布する研究所の出版物に、日本語の抄訳を掲載させて欲しい」と頼んだ。同氏の配慮によりISSAの承認を得て、初期

---

の頃には、『要約』から選んだ数編ずつが、〈ISSA 海外論文要約より〉というタイトルで毎号に利用されていた。『海外情報』が研究所の外部で販売されるようになり、無料の配布というウィルドマン氏との約束が反故になるので、交渉を担当した本人としては大いに弱った。しかし、そのうちに、ISSA が『要約』の活動を停止し、『要約』は配布されなくなったので、困った事態も解消された。

ちなみに、『要約』には、その当時、日本でも多くの人びとの援助と協力を頂いて、色々な論文の抄訳が研究所から ISSA に届けられており、私はその連絡を担当していた。参考のために、『要約』の利用に協力してくれたウィルドマン氏と研究所の ISSA 加盟に触れておこう。私が時折連絡を交わしていた彼は研究所に好意的で、研究所の ISSA 加盟をかねがね強く希望していた。しかし、予算に余力がなかった研究所は、ISSA に加盟していなかった。そのうちに、ウィルドマン氏から準会員として加盟しないかといわれたり、また、研究所の様子も変わってきた。いつ頃のことだったのか忘れたが、研究所は改めて加入の申込みや申請を提出しなかったのに、ISSA の運営機関は研究所を準会員として加盟させることを決定した。ウィルドマン氏がなんらかの配慮をしてくれたのだろう。その決定が彼から届いたので、研究所は安い負担金の準会員になったのである。かつて、ある団体が ISSA に加入するときに、「どのような手続きで加入したのか」と尋ねたので、私は上記の事情を簡単に説明した。主として、ウィルドマン氏と私の個人的な付き合い、そして彼の尽力により、研究所がややあいまいな形と手段で ISSA に加盟したという話を聞いた人は、面食ったかも知れない。なお、各国の色々な人びとや組織との付き合いは大切に、ISSA 事務総長と私の個人的な付き合いは、彼の後任のリス氏、そして現職のホスキンス氏にも続いている。

社会保障は各国で多様な形をし、色々な内容と機能をもっており、また、変化を続けている。『海外情報』は各国のそのような社会保障の情報を、多くの人びとにできるだけ早く伝える重要な役割を果たしており、今後もその役割が期待されるのである。『海外情報』が今後ますます発展を続け、より一層立派なものになることを期待する。

(ひらいし・ながひさ 岐阜経済大学教授、元社会保障研究所調査部長・研究部長併任)